

CarroMag.

ごっくらっく〜♪
ごっくらっく〜♪



レポート

極楽フェス'22

『キャロマグ』ってなに？



三軒茶屋のキャロットタワーにある世田谷パブリックシアターには、ちょっとややこしいのですが、組織名と同じ「世田谷パブリックシアター」(600席)と「シアタートラム」(200席)という2つの劇場があり、年間を通じていろいろな演劇やダンスの作品を上演しています。ですが、世田谷パブリックシアターの活動はこうした劇場での上演活動に留まりません！

3つある稽古場や、セミナールーム、世田谷区内の小中学校や児童館、高齢者施設などで、小学生からお年寄りの方まで、ありとあらゆる方たちが参加できるレクチャーや演劇ワークショップを「学芸事業」として行っています。キャロマグは、そんな世田谷パブリックシアターの、通常目に留まることの少ないこうした活動を不定期で紹介する冊子です。オレンジ色のキャロットタワーにある劇場の冊子だから、キャロットマガジン。それを短くしてキャロマグ(CarroMag)。ご案内をつとめるのは、うさぎのキャロちゃんです。一気にいろいろご紹介はできませんけれど、これをお読みのみなさんに、少しずつ世田谷パブリックシアターの活動を知って頂きたいと思っています。もし、ちょっとでもご興味をもって頂けるような内容がありましたら、今度はぜひ参加しにいらしてくださいね。

レポート

「極楽フェス'22」

はじめに 2

劇場が取り組むコミュニティにおけるアートプロジェクト

恵志美奈子(世田谷パブリックシアター学芸)

極楽フェス'22の1日 4

極楽フェスで大活躍の「なんちゃってちんどん・極楽や」をふりかえる! 7

下馬兵舎時代の思い出の絵地図 12

上映会「写真クラブ・極楽」 14

「支えること」についての小さな劇 16

盆踊り 18

座談会 20

極楽フェスをつくる

極楽フェス'22 24

極楽フェス撮影を終えて

極楽フェス'22のプログラム概要

極楽フェス'21 26

「極楽フェス'21」までの道のり

極楽フェス'21の実施内容

CarroMag.
お知らせ

2023年度世田谷パブリックシアター学芸事業 27

おまけマンガ『たまにはこんな役 #19』

学芸スタッフから

劇場が取り組む コミュニティにおける アートプロジェクト

恵志美奈子 (世田谷パブリックシアター)

シンガポールのアートフェスティバル 「Both Sides, Now」

2018年と2019年、劇場スタッフとアーティストと共にシンガポールを訪問していた私は、劇団ドラマ・ボックスによる公団住宅でのプロジェクト「Both Sides, Now」を視察する機会を得た。「極楽フェス」はこの「Both Sides, Now」に触発されて始まった企画である。

「Both Sides, Now」は、「Arts-based community engagement project (アートを介したコミュニティ連携プロジェクト)」として、「both sides (生きることと死ぬこと)」をテーマに2013年にはじまったアートフェスティバルで、シンガポール各エリアで場所を移しながら開催している。主にコミュニティの人々と時間をかけて創作した作品の展示と、フォーラムシアターや歌等のパフォーマンス上演から構成され、そのほかに子どもたちも楽しめる絵本のプログラムや、その場でできる参加型プログラム、お菓子の配布などもあり、集まった人々の対話が自然と推進されていく工夫が施されている。開催は、病院や福祉系財団等との共催となっている。中華系が多いシンガポールでは、死について語ることは縁起が悪いという考え方がある一方で、「Advance Care Planning (アドバンス・ケア・プランニング=以下ACP)」、つまり、人生の最終段階においてどのような医療・ケアを望むのか、家族等や医療・ケアチームと話し合う取り組みが普及せず、シンガポール保険省の後押しで実施することになったのだという。国家レベルからみると、ACPが進むことは、無駄な医療費が削減できる利点がある。

「いかに死ぬか」を考えるために始まったプロジェクト

ではあるが、そのプロジェクトタイトル「Both Sides, Now」が示す通り、発表されたそれぞれの作品には、むしろ関わった人々がそれまでどのように生きてきたかがより濃く出ていた。私たちは、2018年のChong Pangエリアと、2019年のTelok Blangahエリアでのプロジェクトを視察したが、いずれにおいても、「死ぬこと」を考えると「生きること」を考えることなのだとも思った。

世田谷区下馬での 「極楽フェス」開催に向けて

日本にも適用しうる普遍性のあるテーマだと感じ、また劇場を離れて展開するプロジェクトとして公団住宅という生活の場を選択することも面白いと思ったものの、どう進めていけば良いかの道筋はみえていなかった。しかし、地域の団体・組織と協働しなければならないことは明白だったため、まずは、世田谷パブリックシアターから徒歩15分程度の都営下馬アパートの集会所を訪れた(高齢者たちが集まっているらしいという事前情報があった)。そこでたまたま出会った社会福祉協議会下馬・野沢地区事務局の担当者に話を持ちかけ、手始めに月1回の演劇ワークショップから始めることになった。ちょうど日本でも、2019年に厚労省がACPの啓発を目的に「人生会議」を打ち出していた時期と重なり(吉本興業のポスターが批判を浴び、取り下げになった時期である)、厚労省を経由して、世田谷区でも地域包括ケアセンターや社会福祉協議会には、「ACPの普及啓発事業を行うように」という指示が降りてきていたという。

そうして2019年10月から演劇ワークショップを開始し、助成金も獲得し、日本版「Both Sides, Now」に向けて



いざ! というところで、新型コロナウイルス感染拡大により、計画は頓挫した。詳細は割愛するが(P26~27参照)、その後2021年4月、社会福祉協議会や地域包括ケアセンター、町会とのミーティングで、「生きること/死ぬことをテーマにしたアートを活用した地域のお祭りを下馬地区で実施したい」旨を改めて伝えた。2021年9月に開催することが決まり、あれよあれよという間に、参加団体も増え、世田谷パブリックシアター含む11団体で「極楽フェス'21」を共催することになっていった。何をやるかはその時点では具体的ではなかったが、劇場という福祉とは違う組織が加わることへの期待感があったように思う。「極楽フェス」という名称も満場一致で決まり、それぞれの団体ができること、やりたいことを行うこと、世代間を超えた横のつながりをつくること、地域の人々に下馬地区の団体・組織について知ってもらうことを大きな目標とすることになった。

演劇を介する地域における プロジェクト

初年度の2021年度に、世田谷パブリックシアターは、「下馬人生スゴロク『極楽への道』」、「フォーラムシアター『ピンピン、ヨタヨタ、ドタリの話』」、「写真展示『写真クラブ・極楽』」、「ひらけ絵本!」、「ともにやの部屋〜黒田真史さん」、「下馬兵舎時代の思い出の絵地図」、「介助と障害を巡る旅〜ゆうじさんちシアター」の7つのプログラム、2022年度は前年度のいくつかのプログラムに加え、「『支えること』についての小さな劇」、「なんちゃってちんどん・極楽や」の6つのプログラムを担当した。アートプロジェクト、ソーシャリー・エンゲージド・アー

ト、コミュニティアートプロジェクト等、さまざまな呼び方でアートを介した地域コミュニティにおける取組が、日本国内のみならず全世界の津々浦々で展開されている中、「極楽フェス」がその中でどのような特徴を持つのかを、既存のプロジェクト群上にマッピングすることは私にはできない。ただ世田谷パブリックシアターにとって、「アート」を美術からではなく演劇から発想していることは、「極楽フェス」の特徴の一つに持つ。また、私たちが世田谷パブリックシアターの学芸担当という、地域の方々との台本がないところからの演劇づくりを行っているチームであるため、必然的に、下馬の地域に関わる人たちの物語や思いを出発点に、対話を促すような演劇プログラムが多くなっている。

地域のちょっとした広場や集会所等の、顔の見える範囲の中で発表される作品を通じて、これまで知らなかった同じ地域に暮らす誰かを知り、想像し、対話が生まれていく。それは、身近な誰かの人生にも関心を持ち、誰かの人生を受け入れていくことでもある。地域に暮らす人々のそれぞれの「生きること」が大切に扱われることで一人ひとりがつながり、地域がつながり、地域力が高まっていく。

「極楽」ということばには、「ともに生きている人を見捨てない、自分を見捨てない」という教えがあるといわれている。そこにみんなが共感して始まった「極楽フェス」には、関わる人々全ての個別の思いを受け入れるような度量の深さがあるように感じている。これから「極楽フェス」を積み重ねていくことで、下馬地区がどのように変わっていくのか、とても楽しみにしている。

極楽フェス'22の1日

START!

2022年12月10日(土)、天気は快晴。
12月とは思えない暖かさ、晴天に恵まれました。
会場は、世田谷ボランティアセンター(略してボラセン)と
都営下馬アパート集会所(その隣の広場)。
10時30分まではボラセンからスタート!

みんなでセボネの表紙を作ろう!

ボラセンが発行している情報誌「セボネ」の表紙を合作するコーナーが設けられました。子どもから大人までいろいろな人たちが立ち寄って楽しんでいました。

スタンプラリー

下馬地域の福祉施設をめぐるスタンプラリー。巡った先ではクイズやジャンケンをしてスタンプを獲得。普段足を運ぶことのない施設のことを知ってもらい、ちょっとしたコミュニケーションをとることで、親しみを持ってもらう仕掛けになっていました。

スタンプを
全部集めると
福利が
できたよ!

団体紹介 ブース・お店

下馬地域にある福祉団体を中心に、各団体紹介のブースがあったり、作業所が作っているお菓子やお弁当が売っていたり。

全部手作り
なんだって!
おいしそう!

ともにやの部屋

「ともにやの部屋」は高次脳機能障害の黒田真史さんのライフストーリーを描いた劇です。黒田さんにもとにやたち俳優がインタビューをし、その話をもとに作りました。涙あり、時に笑いあいのこの劇は、老若男女問わず楽しんでもらうことができました。

「ともにやの部屋」の
後に、下馬福祉工房さんの
パフォーマンスもあったよ。
みんなのびのびと
歌って踊っているね

ひらけ絵本!

ともにやとありーによる絵本の読み聞かせ。絵本をただ読むのではなく、俳優2人が声と体を使って表現することで、絵本から物語が飛び出していきます。見ていた子どもたちも声を出して楽しんでいました。

しもまるくんダンス

ボラセンの中の作業所、下馬福祉工房さんのメンバーによるダンス。オリジナルの歌に合わせて、観客にも声をかけながら元気なダンスを披露してくれました。



なんちゃって ちんどん・極楽や

極楽フェスのために結成された「なんちゃってちんどん・極楽や」。みんなでテーマソングの練習をしてから、団地と団地の間を練り歩きながら、下馬アパート第1集会所へ。(詳しくはP7~10をご覧ください。)



極楽フェスで大活躍の 「なんちゃってちんどん・極楽や」 をふりかえる!

対談者：長見亮太さん(下馬福祉工房) 柏木陽さん(演劇百貨店)

聞き手：世田谷パブリックシアター 学芸

下馬福祉工房は、世田谷ボランティアセンターと同じ建物にある福祉作業所(就労継続支援B型事業所)です。

主に知的障害のある人たちが通われており、日々焼き菓子を作ったり、街中で販売したりしています。

極楽フェスには初年度の2021年から参加。プログラム「しもまるくんダンスと一緒に踊ろう!」でオリジナルダンスを披露しました。

今年は、「しもまるくんダンス」に加え、進行役の柏木陽さん、音楽家の青木拓磨さんと「なんちゃってちんどん・極楽や」のメンバーとして、極楽フェスを盛り上げてくれました。

「なんちゃってちんどん・極楽や」でのテーマソング作成に向けたワークショップのこと、極楽フェス本番の日のことを、下馬福祉工房の職員をされている長見亮太さんを囲んで振り返りました。



Nagami Ryota



Kashiwagi Akira

学芸 「ちんどん屋」をご一緒することになったきっかけは、「極楽フェス」の全体会議の時でしたよね。世田谷パブリックシアターが2つの会場(世田谷ボランティアセンターと都営下馬アパート第1集会所)をつなぐために「ちんどん屋はどうか」とアイデアを出したところ、長見さんが「是非一緒にやりたいです!」と、すぐ手をあげていただきました。
長見 うち、ちんどん屋ならやれ

る! わくわくする! と思って。
学芸 その時は、初年度につくった「極楽ソング」を皆で歌って練り歩くこと位しか考えていませんでした。ですが、結果的に「ちんどん屋」はメイン会場をつなぐだけではなく、その間にある団地に向かっても「極楽フェス」をひらく、とても重要な役割を担うことになりましたね。
長見 確かにそうですね。当初はこんなに盛り上がるとは思ってませ

んでした。
学芸 その後、「ちんどん屋」のために、もう一曲つくるアイデアが出て、11月17日に柏木陽さん(ワークショップ進行役)と青木拓磨さん(音楽家)が、下馬福祉工房で歌づくりのワークショップを行いました。
ワークショップで歌をつくる
長見 うちのような福祉施設や介護

を向けられない方とかも、職員さんが連れ出してくれたりして。そういう方々からはわかりやすい反応はないけれど、「届いているに違いない！」って信じてやっていた。職員さんたちは、普段から高齢者の方たちと日々過ごしながら、楽しむことを探していたりするのかな、と想像する時間にもなりました。歌を届けられてよかったなあって心から思いました。

誰もが参加者になり得る場をつくる

長見 ちんどん屋って、気づいたらやっている側になっていたじゃないですか。最初は連れて行かれていたはずなのに、着いた時には拍手される側になっていて。

学芸 盆踊りもそうですね。はじめは見ていただけなのに、気づいたら輪に加わって踊っている。そうはいつもなかなか輪の中に入れない人

も多くいる中で、下馬福祉工房の利用者さんはなんの躊躇いもなく、わーって入っていかれましたよね。

長見 そういう彼らがすごいな、って思ったし、盆踊りというものもすごいなと思いました。あの空間はすごかったですね。トランス状態。

柏木 下馬福祉工房の人たちは、ああいう場でこそ輝く人たちですね。

長見 正解を求められない、何をしてもいい、ちょっと羽目をはずしてもいい。のびのびしていましたよね。

柏木 そんな風に自由に表現したりすることができなくなったこの3年はどうされていたのですか？

長見 施設の中で場をつくるように心がけていました。そして、いざという時に備えて力を蓄えていました。何もやらない選択肢はなかったですね。毎月誕生日会をやっているのですが、一人ひとりの出し物も決まっています、20年近く同じようにやっているんです。そういう、一見何を繰り返

返しやってんだらう、ということがいきてくる時があるんですよね、今回みたいに。

学芸 下馬福祉工房のみなさんが生き生きと輝いていた今回のちんどん屋は、当初は会場をつなぐブリッジ的なプログラムとしての位置づけでしたが、最終的にはフェスの参加者たちをつなぐ重要なプログラムになりましたね。

柏木 下馬福祉工房さんが参加したことで、地域の人たちにその存在をはっきりと見せる機会になっていました。それぞれの施設や団体が個別に参加するだけではないプログラムの可能性を見せてくれたと思います。

長見 そうしたごちゃまぜ感こそが、お祭りにしていましたよね。来年のちんどん屋は、さらにおじちゃんおばあちゃんも一緒に練り歩いて、下馬に暮らすさまざまな人たちの顔が見えるようなものになったらいいなあと思います。



次の会場は集会所隣の広場だよ。



太鼓と踊りのパフォーマンス

下馬2丁目北町会で活動している太鼓と踊りのグループがお祭り気分を盛り上げました。

かっこいいね！太鼓の音が聞こえてきた！



こっこの広場もにぎわっているね！



子ども服と食器販売

子ども服、雑貨など、掘り出しものがいっぱい、大人気のコーナーでした。

優っくりカフェ

下馬の高齢者施設「優っくり村」の人たちによる認知症カフェ。キャラクターに扮したスタッフさんがドリンクをふるまってくれました。



下馬兵舎時代の 思い出の絵地図

進行役：阿部健一さん(ドラマツルク・地域計画研究者)

2021年の『極楽フェス』では、都営下馬アパートの兵舎時代を知る男性の方々に当時の様子をうかがい、1枚の「下馬兵舎時代の思い出の絵地図」にまとめて展示しました。今年の開催にあたって、絵地図の「女性編」を作成・展示すべく、11月末に女性の方々にお集まりいただき、話をうかがいました。おしゃべりをしながら思い出した兵舎時代のエピソードを一枚の地図に書き加えていき、自分たちで「思い出の絵地図」にしました。
「男の子と女の子で遊び方や遊ぶ場所が違った?」「炊事場や水まわりはどうなっていた?」など、前回とはちがう角度から、下馬の兵舎時代を辿ることができました。今後もこの絵地図づくりの活動は継続していく予定です。



聞き取り

昭和6年~18年生まれの女性のみなさまにお話を伺いました。「男の子の記憶のなかの女の子」と女性たちが話す「当時の女の子(自分たち)の姿」はかなり異なり、男の子は属するグループで生きていくのに必死で、女の子のほうが寮のなかの人間模様をよく見ているように感じました。同じ環境で生活していても、そこで気にして見ているもの、記憶に残っていくものが違うことも印象的でした。

地図づくり

まずは、聞き取りのメモと録音をもとに、「思い出のエピソード」をひとつひとつ見出し&説明文に整理していきました。単に書き写すのではなく、当時の状況を想像しながら進めることで、「まだわかっていないこと」が浮き彫りになります。今回はフェスの日をヒアリングの続きにしたいという考えもあり、「まだわかっていないこと」をリストにまとめ、フェス当日にお聞きすることにしました。最後に、大きな白地図を用意して、該当する場所にエピソードを貼り付け、提供して下さった写真を展示し、お話いただいたみなさんの似顔絵もコメントの横に貼りました。



下馬は
団地ができる前は
兵舎があったん
だって。



フェス当日

お話をうかがった女性のみなさんに遊びに来ていただき、メモや当時の部屋の間取り図をもとに「これってこういう事ではあるんですか?」「〇〇って具体的にはどういう様子だったんですか?」など、より詳細なお話を伺いました。「わたしなんにも覚えてないわよ」「〇〇さんの方が詳しいんじゃないの?」と、和気あいあいとした雰囲気のみなさん楽しそうにおしゃべりをしていました。このブースで初めて絵地図や兵舎時代を知る方も多く、ブースの存在が興味をそそるきっかけにもなっていたようでした。「知らなかった」「麻雀工場があったんだ!」と、新鮮な反応が多く見られ、なかには「私も兵舎を覚えている」という初めて出会う方も何人か来られ、今後の地図づくりを発展させていけそうな出会いがたくさんありました。



まちは変化し続けていて、そこで暮らすひとたちの生活も時代によって変わっていきます。下馬のようにまちが丸ごと建て替えられていく場所では、昔といまのつながりを風景から想像しにくい部分がありますが、だからこそある日の暮らしを知ることでまちが厚みをもって感じられてくるようにも思います。絵地図づくりはそんな厚みに触れるきっかけを当事者のみなさんと一緒に育む、オーラルヒストリーのアーカイブ企画です。「絵地図」を軸にこれからもコミュニケーションを重ね、じっくりコトコトと場を育てていきたいと思っています。

阿部健一

上映会

「写真クラブ・極楽」

進行役：金川晋吾さん(写真家)

出演者(ワークショップ参加者)：下馬地域在住の65歳以上の方々

「写真クラブ・極楽」は、下馬地域在住の65歳以上の方々を対象に、都営下馬アパートの集会所で実施しているワークショップです。極楽フェスでは、7名の参加者の、写真と日記の朗読を組み合わせたスライドショーを上映しました。今回のテーマは、「私の生活」。参加者は、テーマに沿って写真の撮影や日記に取り組みました。そしてそれらの写真や日記を進行役の金川晋吾さんがスライドショー形式で構成し、30分の映像作品にまとめました。

会場ではスライドショーの上映に加え、参加者の写真と、金川さんがワークショップの様子を撮影した写真を壁面に展示。参加者の「生活」が透けて見えるような展示となりました。観客の半数程度は参加者と同年代の高齢者の方々。日記の朗読を聞きながら「あるある」というように、時には笑い声があがり親近感をもって楽しんでいただくことができました。最後には、参加者のみなさんも前に出て一礼し、上映会は終了しました。



参加者の人たちが
「私の生活」を
テーマに撮った
写真



自分のことを語る。その人らしさを見いだす。

写真クラブ・極楽は2020年の11月から、だいたい月1回のペースで活動を続けています。月1回の集会では、この1か月の間に撮ったおたがいの写真を見せ合いながら、参加者もスタッフも一緒になって、毎日の生活のことや昔の思い出など、自由にお話しています。

2021年春からは写真を撮ることに加えて、その写真にまつわることを日記として書くことにおこなっています。参加者のみなさんが撮る写真には、生活感やその人らしさがあらわれていて、また、日記を通して語られる日々の出来事や心の動きもそれぞれの個性があらわれていて本当に素晴らしく、私は毎回一人の観客としてとても楽しみにしています。

2022年の夏からは「私の生活」というテーマを設定して、参加者のみなさんには写真と日記でご自身の生活を表現することに挑戦していただきました。ごくごくありふれた日常的なもの、例えば毎日の食事やベランダに干された洗濯物やよく見ているテレビ番組の画面を撮ってみたり、鏡に写りこんだ自分の姿を撮ってみたり、写真に撮られることを恥ずかしがる家族と一緒に写真を撮るために、二人でならんでいる姿の影を撮ってみたり等々、「私の生活」を表現するために、みなさんいろいろと創意工夫をされていて、毎回おもしろい発見がありました。

また、回を重ねるごとに、参加者のみなさんは写真の撮り方だけではなく、写真の見方、おもしろがり方もどんどん上達されていったと思います。他の人が撮った本当になにげない写真に対しても、そこにその人らしさを見つけ出して、いろんなコメントをしてくださるようになりました。写真を見せ合うことによって、おたがいの生活を共有し合うような時間が生まれていたと思います。12月の極楽フェスでは、それまでの写真日記のなかから数日をピックアップし、写真のスライドショーに合わせてその日の日記を朗読した声をオーバーラップする映像作品を上映しました。今回は時間の都合上15分弱にまとめましたが、お一人お一人の肉声が本当に魅力的なので、できれば1時間とか2時間ぐらいのロングバージョンを作りたくくなりました。

金川晋吾

「支えること」についての 小さな劇

作・演出・出演：開発彩子さん、松田文さん、山本雅幸さん

下馬地区に住んでいる人たちの生活を支えるお仕事をされている/いた方に、「支援すること、支えること」についてインタビューし、2つの短い演劇にして発表しました。インタビューに協力してくださったのは、障害福祉に関わるお仕事をされている方と、高齢福祉に関わるお仕事をされている方です。

小さな劇1 「無償の愛を受け取る～精神障害者を支える人の話～」

精神障害のある人を支える仕事をしている福祉作業所職員の方のお話です。下馬団地に住んでいた福祉作業所の利用者のこと、福祉作業所の日々のできごとなど、もうすぐ定年を迎える、経験豊富な支援者の方が淡々とお話して下さったインタビューから作りしました。

小さな劇2 「人と人とのつながり～高齢者を支える人の話～」

下馬地域の高齢者施設でバリバリ働いている、若くして施設の管理者をしている方に行ったインタビューをもとにしています。高齢者介護の仕事を始めたきっかけ、高齢者との関わりが自身にもたらすものについて語って下さったことを中心に劇を構成しました。



劇を観てお寄せいただいた感想

人が支えあう事について、暗くならず楽しく表現されていてとても前向きな気持ちにさせられました。私も50歳を過ぎ、両親の介護に直面していく年になりましたが、こういう支えあう機会が受け皿になったら、本当にいいなと感じました。名インタビューア、名演です！ プラボー！

私の姉は知的障がいを持っています。ある時からずっと私より年下で、でも老いていくのはすごく早く、ずっと接し方が分からなかったんですが、いつまでも姉である事は変わりなく、また一人の人間であるので、ありのままの姉を受け入れられたらと思いました。心温まる劇でした。障がいも高齢も、介護や対応、世話が大変というイメージがある中、実際働いている人のメッセージがこのよう

な劇の形でみなさんに伝えられること、すごく素敵だと思います。

私は福祉や介護の現場から普段全く縁のない生活を送っていますが、自分の親や自身の数十年後に思いをはせる良い機会となりました。

世田谷区は「つなぐ」というキーワードを福祉の計画の中にもいれているので、こうして演劇のプロの力を借りて地域の人たちに伝えることで障害に対しての理解が深まる事を私は切に願っております。そして、いつか障害がある人もない人も、互いに手を取り合いお互いに支えあうことが大多数の当たり前になる日が来るように、私も日々の業務に取り組もうと思っております。

『「支えること」についての小さな劇』のつくりかた

高齢者の介護施設で働いている矢野さん、精神障害の方が通う作業所の所長をしている新山さん(共に仮名)。「支えること」を仕事にしているお二人の話をもとに、演劇をつくりました。ふだんの仕事のこと、施設からいなくなってしまった人のこと、これまでの人生、これから先のこと。いろんなお話を聞かせていただいて、まずはそれを「聞き書き」という手法でまとめました。聞き手である私たちのフィルターを通して、ご本人の一人語りの形で書いたものです。それを創作メンバー、学芸スタッフみんなでたくさん意見を出し合いながら修正して、さらにシーンとして立ち上げてみたいところをピックアップして実際にやってみて…という形で作品を作っていました。いわゆる作家や演出家といった役割は置かず、みんなで作った作品です。

そうしてある程度できたものを、インタビューしたお二人にも見てもらって、事実と違うところがないか、どういう表現なら誤解なく伝わるかなどご意見をいただきました。例えば、認知症の方特有の行動を面白おかしく描いているシーンがありました。それは矢野さんがその行動の背景(どういう目的や理由があってその行動に至るのか)に思いをはせ、愛情をもって楽しみながら受け止めているからこそ、そういう描き方になりました。ただ、一見すると笑いものになっているようにも受け取られかねない。ではどうしたら面白おかしいだけでなく、その真摯で柔らかく興味深そうな眼差しが伝わり、かつ見た人が認知症のことを想像し理解してもらえるようなものになるか。セリフを追加したり、ニュアンスを変えたりしながら、一緒に考え、決めていきました。

また、利用者さん同士のやり取りは、もちろん実際に見ていたわけではないので、想像で補った部分もたくさんあります。実際のやり取りそのまま、とはもちろんいかないでしょうが、「そういうこと、あるある」と言ってもらって、フィクションとして、リアリティーを持って成立していることにほっとしたりもしました。

お二人とも共通して、自分たちがしていることを、ただ「支える」ことだとは思ってなくて、ある面では利用者さんに自分たちが支えられ、そこが彼ら自身の居場所にもなっていました。自分が生きやすいように、そこに居る。自分を含めて、そこにいる人たちのことを考える。仕事という枠を超えて、その場所、そこに居る人たちとつながりを持っているのだと思います。

新山さんは、利用者さんだけでなく自分自身も、どうやったらその地域で老いて死んでいくことができるのか、考えていました。どうやって生きて、どうやって死んでいくのか。この作品を見た人たちにも、ただ他人のエピソードや施設での特殊な話としてではなく、自分ごととして受け取ってもらえるように構成していく意識を改めて持ちました。

いわゆる「ふつうの」演劇では、俳優は役を演じます。でもこの作品では、演じるというより「伝える」という意識を強く持っていました。矢野さん・新山さんが見ているもの、感じていることを伝える、その媒介として自分があるイメージです。私たちを通して、彼らのまなざし、彼らの存在が伝わりますように、という思いを込めて。

山本雅幸

盆踊り



わー、いろいろな
人がいるね。
極楽って
こんな感じかも！



私が子どもの頃、日本の街では、至る所で盆踊りがありました。夏のお盆が過ぎた時期に、街の人々が、お地蔵さんの前に集まり、提灯を掲げ、踊りを舞って先祖の霊を供養する。今思えば、そんな目的で盆踊りは開催されていたのだと思うのです。この50年の間に、随分と街の様子は変わってしまいました。個々人の世界が大切になり、近所付き合いも随分と減ってしまったと思います。

私の記憶の中にある盆踊りは、年に一度、町内会の人たちが集まり、いろんなものを持ち寄って、物々交換したり、出店の屋台で焼きそばやたこ焼き、綿菓子を楽しむといった、夏の一大イベントなものでした。いつもはあまり話もしない、近所のおちゃんや、おばちゃんたちが、「あんた大きくなったねえ」とか「将来何になりたいの?」とか、別に聞かなくてもいい質問を大人たちにされた記憶があります。毎日学校の教室で会っている同級生の女の子が、浴衣姿で踊っている姿を見て心が躍ったことも思い出さずにはいられません。でも、そんな「その時だけ」の近所のコミュニケーションが、子どもにとって世界の大きさを教えてくれたもので、日頃、家族や学校での対話しかない世界に、全く違う世界があることを教えてくれたのも確かなのです。

もちろん、時には、知らない他者との出会いに違和感を覚えたのも確かです。思春期の私は、反発したこともありましたが、でも、確実に言えるのは、自分や近い家族以外の人から、「家族や学校の他に世界は存在するのだ」ということを教えられたという事実です。

12月に賑やかに開催された「極楽フェス」は、現代の地域コミュニケーションの新しい形、代案のように思えてくるのです。いやいや、代案というよりは、むしろ、新しい地域住民の交流の場と言っても過言ではないかと思うのです。

世田谷の下馬地域にある「下馬団地」の住民と周辺にある福祉施設、町内会の方々の協力を得て、一昨年から始まった「極楽フェス」には、私たちの期待を超えて、様々な方々がお集りいただきました。

朝から、晴天が続いたこの日に、ボランティアセンターでの「とにもやの部屋」の演劇を皮切りに、様々な表現が繰り広げられました。ダンスに、バザール、写真クラブ、演劇公演。ちんどん屋さんの福祉施設巡り。

極め付けは、最終イベントで行われた、盆踊りでした。それまでの、イベントに登場した、様々な出演者に加わり、下馬団地の住民の皆さん、福祉施設の皆さん、そして世田谷パブリックシアターのスタッフ。和服姿にサンタクロースや、ぬいぐるみ。ほとんど、この世のものとは思えない、多種多様な服装をした方々による盆踊りは、まさに「極楽」そのもの。現代のコミュニケーションの場として、素晴らしい展開を見せてくれたのではないかと思うのです。

劇場が地域社会の交流の場を作れたのだとしたら、これほど嬉しいことはありません。

白井晃(世田谷パブリックシアター芸術監督)

極楽フェスをつくる

対談者：大塚一恵さん（下馬あんしんすこやかセンター）

山内 聡さん（地域障害者相談支援センター・ぼーとせたがや）

聞き手：世田谷パブリックシアター 学芸

社会福祉法人世田谷ボランティア協会が、世田谷区から受託し運営する「地域障害者相談支援センター・ぼーとせたがや」の相談員。地域の方の障害にまつわる困りごと、生活、仕事、お金などの相談を担当。相談者は10才のお子さんから80代の方まで。



Yamauchi Satoshi

社会福祉法人日本フレンズ奉仕団が、世田谷区から受託し運営する地域包括支援センター「下馬あんしんすこやかセンター」勤務。下馬野沢地区の65歳以上の方の相談窓口として、介護保険をはじめとする生活全般の相談に加え、あらゆる世代の方の身近なご相談にも対応。



Otsuka Kazue



2021年に始まった「極楽フェス」。初年度から運営に携わってきた

大塚さん（下馬あんしんすこやかセンター）と山内さん（地域障害者相談支援センター・ぼーとせたがや）

のお二人と共に、極楽フェスは下馬の地域に何をもたらしたのか、今後はどういう可能性があるか。

そして、極楽フェスは今後どのように下馬地区で展開し得るのか。

2回目の極楽フェスが終わり、ひと段落ついた2023年1月に改めて語り合いました。

なんとか開催に

こぎつけた1年目

学芸 「極楽フェス」は2021年9月に第1回目を開催しました。コロナ禍真っ最中でしたが、大変なことなどはありましたか？

大塚 振り返っても、すごいチャレンジだったなと思います。福祉関係者の間では、イベントをやる、やらない等の判断をすること自体がとても難しかったですから。

山内 どうやれば、みんなにとって安全で、安心できるイベントになるかを話し合うことから始めましたよね。地域で行われるイベントが他に全くない中で、「極楽フェス」は2年半ぶりくらいの地域のイ

ベントとなり、思いの外たくさんの方が来ました。人数制限をして、来場者の名前と住所を書いてもらってとか、いろいろ工夫もしましたね。

学芸 2021年8月には感染者数が拡大し、それまでやる気だった団体も後ろ向きになったりもしました。区立施設での開催だったので、区が施設利用の制限をかけたら中止という綱渡りでの実施でした。

大塚 それでもなんとか1年目を開催したことが、2年目につながりましたよね。世田谷パブリックシアターさんによって実現したアートを通じた地域のお祭りに誰もが可能性を感じ、また来年もやりましょう！と言い合って終わりました。

アートで視点が変わる

学芸 とはいえ、2022年になってもコロナは収まらず、いつ2回目を実施するか決めきれないまま時間は過ぎてしまいました。それでも2回目をやってみようと思った理由は何でしょうか。

山内 福祉と地域をつなげる取り組みは、ほくらも福祉の視点の手法でこれまでも色々やってきていました。バザーをやったり、イベントをやったり。そこにアートという新しい切り口が入るとどうなるのか、最初は想像がつかなかったですね。でも実際にやっているのを見たら、ガシ！とつながった感じがしました。ぼくらがどうしても支援者側からの視

点になっちゃうところを、支援される側だったり、地域の視点からだったり、色々な視点からイベントのあり様を描けるのは、アートの力なのかなと思います。

大塚 アートって難しそうだと最初は思っていました。でも、極楽フェスで上演された演劇をみたら、衝撃でしたね。フォーラムシアター「ピンピン、ヨタヨタ、ドタリの話」は団地の課題をヒアリングしてつくってくださった作品でした。私たちは、何でも言葉で説明するので、それだと理解が難しいと感じる方もいます。それが、演劇で見せるとなぜかちゃんと伝わって、みんなで内容について話し合ったりしていることにものすごい衝撃を受けたんですよ。演劇の力ってすごい！みんなにぜひ見て欲しいと思いました。

山内 誰にとってもわかりやすい、ってすごいことですよね。惹きつける力、結び付ける力、伝える力、その3つがアートにはあって、そこに僕ら福祉の人間が混ざることによって化学反応が起きたのが極楽フェスなのかなと思いました。

学芸 福祉は、生活の場で日常を支えることが基本ですね。そこにアート・演劇が入ると、違う角度で日常が照射され、新たに見えてくることがあると思います。日常生活の場により近いところで実施する今回の「極楽フェス」のようなプロジェクトは、劇場空間では絶対にできないので、一緒にできるのは私たちにとってもとても面白いです。極楽フェスには、日常の中から成立するアートの醍醐味があると思いました。

山内 地域にはドラマがあふれているので、私たちはそれを日々仕事として見ているんだけど、反対側（アート側）から見ると「そう捉えるんだ」って新鮮な感じもありましたね。

となりの人の顔がみえる 関係性

大塚 下馬は、大規模な都営住宅があって高齢化率も高い地区です。でも商店街がない。そうすると、高齢者はなかなか外に出てきてくれない。地域に暮らす人たちの顔が見えにくいんです。そういう地区で極楽フェスをやったことに意味があると思う

んですよ。また、下馬では地域の中心に都営住宅があって、周りに社会福祉法人が点在していて、でも、その法人同士、地域の人同士が何かを一緒にやることもほとんどないんです。私たち福祉の側が目指している地域づくりは、近くにいるけど知らなかった人のことを知り、となりの人の顔が見えるようになって地域の力を高めていくこと。今回の「極楽フェス」はまさにそうした活動になっていました。

山内 さっき、下馬福祉工房の利用者さんと会ったときに「（極楽フェス）楽しかったね〜」って声をかけてくれたんです。会うたびに「おつかれ！」って挨拶してくれるようになった利用者さんもいます。そうやって顔がみえることで、少しずつつながっています。

学芸 『ともにやの部屋〜黒田真史さん編』は、ケアセンターふらっとを利用されている黒田さんにインタビューをし、交通事故で高次脳機能障害になった経緯やどんな風に生活していращやるかを演劇にした作品です。それを見た中学生が、今度



黒田さんみたいな人に会ったら「お手伝いすることありますか」って声かけてみようと思います、って言ってくれたんですね。はじめは声をかけるのが怖かったし、何を言っているかわからなかったけど、劇を見たら声をかけてみたらいいんだってわかった、って。そうやって、演劇は、他の人のことを考え、想像するきっかけにはなりますよね。

大塚 心の距離が近づきますよね。

学芸 「黒田さんのことはもちろん知っていたけど、どういう人なのか全く知らなかったから、今は勝手に黒田さんを身近に感じる」ということをおっしゃった方もいました。今まで知らなかった人の人生を想像する時間になっていたのだと思います。そうやって少しずつとなりの人のことを知っていくことが大切ですよ。

縦割り行政を超えた場づくり

大塚 改めて下馬について思うのは、本当にいろんな施設が密集している地域だということですね。障害者、高齢者、子ども、さまざまな施設が

あるので、縦割りでない支援ができる地域なんです。それはどの地域でもできることじゃないですよ。

学芸 地域でボランティアをしたい人、して欲しい人をつなぐ、世田谷ボランティアセンターのような場所もありますよね。

山内 あとは、極楽フェス自体が一つの居場所になり得ると感じました。2年目のフェスには、40年ひきこもりだった方が来てくれました。もともとは3年前くらいに、その方のお母さんからぼーと・せたがやに相談があったんです。うちの相談員がゆっくり関わっていく中で、料理と一緒に作ったり、買い物に行ったりするようになりました。そうやって少しずつ外に目も向くようになってきたのですが、そうしたらいになんと極楽フェスに来たんですよ！もう大事件！ほかに、ぼーとに相談に来てる精神障害の方が、極楽フェスに手伝いに来てくれたりもしました。その方は、精神障害になって、今まで出来たことが出来なくなっただけで納得がいかなかったんですね。じゃああなたのできることをか

ら希望に即して考えましょう、って話し合っ、フェスの手伝いに来てくれることになったんです。本人が主体的に関わり、活動する場になっていましたね。来てみたいと思わせる何かがあったのかもしれない。

地域をつないだ「ちんどん屋」と「盆踊り」

大塚 「なんちゃってちんどん・極楽や」も、建物の中だけじゃなくて、外に出て、まちとつながることができましたよね。今後はさらに参加者を増やせるといいですよ。ちんどん屋の後ろに子どもがついて行ったら「何やってんの〜」ってまちの人が声かけるだろうし。

学芸 ちんどん屋の列が、どんどん伸びていくといいですよ。地域に住んでいる人たちが可視化されつつ、まちをつないでいく感じで。お祭りの山車みたいな感じもありましたね。

山内 ちんどん屋のアイデアが出た時の盛り上がり方はすごかったですよね。あ、それいいね！ってみんなでいろいろなアイデアができた。話し合いながらできたのは、い

ろんな人が関わる企画だったからですよ。

学芸 盆踊りもすごかったですね。

山内 すごかった！あれもまさに話し合いの中から生まれた企画だよ。

大塚 町会が参加して、この3年間でできていなかった盆踊りができたというのは大きかったですよね。

山内 老いも若きも、障害のある人もない人も、キティちゃんとかサンタとかいろんな扮装した人たちがいて。本当にいろんな人がごちゃまぜで。カオス！なんだけど幸せな感じで、まさに極楽でしたよね。

大塚 町会の力もありますよね、太鼓バンバンたたいても、誰も怒らなかったですもんね。

学芸 でも、いわゆる町の盆踊りとは違いましたよね。障害のある人も含めて、ほんとの意味でいろんな人が参加しています。

これからの「極楽フェス」

学芸 来年以降、どんなお祭りにしていきたいですか？

大塚 あんすこととしては、次はもう一歩踏み込んだことがしたいです。

いま、認知症の方やその介護者、地域の方に向けてアクション講座というのをやっているんですね。世田谷区独自の認知症サポーター養成講座なんですけど、当事者の体験を聞くことを大事にしています。それを極楽フェスでやりたいですね。認知症になっても地域で暮らせるようになるんですけど、元々知らない人には手を差し伸べるのが難しいじゃないですか。ふだんからつながっていれば、認知症になっても周りが声をかけやすいです。

山内 認知症の人や障害のある人への誤解ってたくさんありますよね。認知症になったら何も分からなくなっちゃうとか、障害のある人は怖い、何も分からない人って思われたりする。そういう誤解を解くには、それぞれの人を知ってってもらうのが良いのかなと思っています。だから当事者が真ん中において、彼らの心の叫び、苦しさや葛藤が伝えていけるといいかな。

大塚 精神障害の方も「地域の困った人」ってされてしまいがちです。本当はそんなことないのだけど、周

りが障害のことをわからないからそうなるってしまうわけですよ。

山内 わからないを減らしていきたいですよ。一人ひとり違って、それぞれストーリーがあることを知ってもらいたい。

学芸 アートは、個を尊重し、個の物語を語れるのがいいですよ。その人個人のドラマ、人生を語ることで、普遍性や共通性が見えてくる。アートを通じて、まちの人たちの個別の物語を見せていけたらいいなと思います。

山内 この極楽フェスが地域に根付くお祭りになっていくといいなと思っています。今までは地域のイベントとして、盆踊り、餅つき、運動会とかがあったと思うのですが、時代とともに減ってきてしまっている。極楽フェスがそれを全て含みこんだようなイベントになっていくのが理想かな。まちの人みんなが主体的に参加できるといいですよ。地道に関係する団体も増やしていく。そうすると、また思ってもみない化学反応が起こるんじゃないかと思うので、それが楽しみです。



極楽フェス撮影を終えて

橋本孝雄さん(写真家)



古い団地が集まるその地域の老朽化した棟では、大規模な建て替え工事が行われている。その地域のなかにフェスの会場となる福祉施設はあり、午前中はそこでいくつかの出し物が行われた。事故で重い障害を持ち、その実体験をもとに作られた演劇では、そのモデルとなっている本人も観客の中にいて、電動車椅子に座って劇を観ている。劇中には軽快なユーモアが所々に混じり、車椅子のうえでその人は、目を細めて笑顔を見せる。僕はその表情を写真に収めながら、その笑顔の奥にあるだろう、自分には想像できないほどの厚い時間の重なりを思った。彼がそこで静かに微笑んでいることで、この劇は完成しているように思えた。それから福祉作業所の入所者、スタッフによる合唱。同じ曲のなかで、それぞれの身体はそれぞれのリズムを持って動いているようで、そのバラバラさがなぜか心地よく、その音はより広く遠くへ拡散されていくように思えた。絵本の朗読会では、読み手は衣装を着こみ、絵本から飛び出したように身体ごとで物語を語り、観客を牽いて一緒に飛んだり、その場で地団駄を踏むように駆け足をしたりで、観客の子供達には全身で物語の中に入りこんでいくような喜びがあり、大人達もそんな子供達のそばにいて一緒に楽しそうだ。その後、即席のちんどん屋が登場して、みんなを扇動しながら施設を出発する。カラフルな衣装を揺らして、ラッパ、ギター、タンバリンを鳴らしながら合唱し、ゆったりとスキップを踏むように団地の間を進んでゆく。写真に写った、行進してゆく彼の身体を揺らすあの異彩なリズム。彼のなかで音楽はどんなふう広がっているんだろう。一行はその後、老人ホームを2カ所周り、ベランダやエントランスで出迎えてくれた入所者、スタッフの人達の前で演奏し、どちらの施設でも最後に「見上げてごらん夜の星を」を合唱した。歌に合わせて老齢の身体が優しく揺れて、それぞれの中にある遠い記憶がじんわりと浮かんで歌に重なり、混じる。夕方に差し掛かり、近くの広場の会場では地域の女性達が叩く太鼓を中心に様々な人達が輪をつくり、盆踊りがまわりはじめた。

撮影を終えて考えていた。人は何かを伝えるために、それを音楽にしたり、物語にしたり、演劇にしたり、踊ったり、どうしてそんな遠回りをするんだろうか。想像してみる。ただ具体的な情報だけを交換している生活を。やっぱりそんなのは嫌だ、と思う。一人だけで何かわかってても寂しい。誰かと一緒にわかりたい。そのためにみんな回りくどくて、いろんなことをやっているんじゃないだろうか。

極楽フェス'22のプログラム概要



会場1 世田谷ボランティアセンター
2022年12月10日(土) 10時30分～15時

会場2 都営下馬団地第1集会所
2022年12月10日(土) 12時30分～15時30分

パフォーマンス

- ◆ 「ともにゃの部屋～黒田真史さん」★
18歳で交通事故にあい、高次脳機能障害でケアセンターふらっとに通う黒田さん。そんな黒田さんの人生を、ともにゃと俳優たちが演劇とトークでお届けします！
- ◆ 下馬福祉工房の「しもまるくんダンスを一緒に踊ろう！」
「下馬福祉工房」は知的障害のある方が働く場所。そこに通う皆による名物ダンス「しもまるくんダンス」を一緒に踊りましょう！
- ◆ 「ひらけ絵本！」★
俳優たちによるアクティブでちょっぴり参加型な絵本読み聞かせ。小さなお子さまから大人まで楽しめる内容です。

お店

- ◆ 下馬福祉工房のお店「しもまるくんクッキー」
- ◆ ケアセンターふらっとのお店「Nakagawa Yoko オリジナルバッグ販売」
- ◆ ぼーとせたがやのお店「作業所オリジナル商品販売」
- ◆ フレンズケアセンターのお店「おいしい格安お弁当販売」
- ◆ パートナーセンターの活動紹介
- ◆ 下馬あんしんすこやかセンターの「ミニ相談窓口」
- ◆ 参加型アート「みんなでセボネの表紙を作ろう！」

パフォーマンス

- ◆ 下馬2丁目北町会 太鼓と踊り
下馬2丁目北町会で活躍の太鼓と踊りのグループがお祭り気分を盛り上げます！
- ◆ 上映会「写真クラブ・極楽」★
65歳以上の下馬地域にお住まいのみなさんと定期的に開催している「写真クラブ・極楽」。映像作品の上演とトークを行います。
- ◆ 「支えること」についての小さな劇★
下馬地区に住民の生活を支援するお仕事をしている方に「支えること」についてインタビュー。短い演劇にして発表します。

お店・カフェ・展示

- ◆ 世田谷ボランティアセンターのお店「子ども服と食器販売」
「出張ミニリサイクル市」として、子ども服と食器を中心のパザールを開催します。掘り出し物があるかも！?
- ◆ 優ったりカフェ(認知症カフェ)
優ったり村(グループホームと小規模多機能型居宅介護事業)を利用・入居されている方が接客を行います。くつろぎのひと時をお楽しみください。
- ◆ 看護師と話そう!「暮らしの保健室」
医療・介護・健康などなんでも気軽に相談できます!
- ◆ 「下馬兵舎時代の思い出の絵地図」★
兵舎時代から下馬にお住まいの方々のお話しをもとに作った絵地図(2021年)を大きく貼りだします! 皆さんの思い出も聞かせてください。

★は世田谷パブリックシアターが企画・制作したプログラムです。

会場1・2をつなぐプログラム

- ◆ なんちゃってちんどん・極楽や
極楽フェスのテーマソングと共に、会場間やスタンプラリーの会場となる施設間などを練り歩きます! 楽器を片手に一緒に歩こう!
- ◆ 下馬・極楽スタンプラリー
極楽フェスに参加している施設等をめぐるスタンプラリー。スタンプを集めたら福引に挑戦!【カード配布場所】世田谷ボランティアセンター/都営下馬アパート第1集会所(枚数限定)

主催 下馬2丁目北町会、社会福祉法人日本フレンズ奉仕団(フレンズケアセンター、下馬あんしんすこやかセンター)、社会福祉法人世田谷ボランティア協会(世田谷ボランティアセンター、ケアセンターふらっと、地域障害者相談支援センターぼーとせたがや、パートナーセンター)、世田谷区立下馬福祉工房、社会福祉法人奉優会(優ったり村下馬)、三宿病院「訪問看護ステーション」、公益財団法人せたがや文化財団(世田谷パブリックシアター)

『極楽フェス'21』までの道のり

2018.12 ~ 2021.9

2018年12月

シンガポールの劇団ドラマボックスが行う公園住宅でのアートプロジェクト“Both Side's Now”を、別プロジェクトでシンガポール滞在中の劇場スタッフとアーティストたちが視察。生と死をテーマにするプロジェクトに感化され、日本でも実施を検討しはじめる。

2020年4月

Tokyo Tokyo FESTIVAL 助成金採択されるが新型コロナウイルスで計画頓挫。

2020年10月

「ともに生きている人を見捨てない、自分を見捨てない」という「極楽」の教えを知り、「デイ」の企画を「**だれでも表現クラブ・極楽**」、「**だれでも写真クラブ・極楽**」に変更。都営下馬アパート集会所で再始動。

2020年9月

社協、下馬2丁目北町会(以下、町会)の皆さんと「デイ」再開に向けて打合せ。

2018年 12月

2019年 10月

2020年 1月

2020年 3月

2020年 4月

2020年 9月

2020年 10月

2020年 12月

2021年 1月

2021年 2月

2021年 3月

2021年 4月

2021年 5月

2021年 6月

2021年 7月

2021年 8月

2021年 9月4日・5日

極楽フェス'21



『だれでも表現クラブ・極楽』

日々感じていることや記憶を、さまざまな方法で形にして分かち合うクラブです。身体を動かしたり、工作したり、語り合います。いつもと少し違う時間を過ごしませんか?どなたでも大歓迎です。気軽にご参加ください!(募集チラシより)

進行役:花崎攝、長崎麻貴 対象:どなたでも
実施日:2020年10月7日、11月4日、12月2日、2021年1月13日、2月3日、3月3日



『だれでも写真クラブ・極楽』

誰もが自由に入出りできる写真クラブです。使うカメラは携帯電話でも、デジタルカメラでも、フィルムカメラでも、何でも大丈夫!どんな人が撮ったどんな写真も、かけがえのない魅力をもっています。あなたの撮った写真をぜひ見せてください。誰かに写真を見せることで、新たな発見がきっとありますよ。(募集チラシより)

進行役:金川晋吾
対象:下馬地区在住の65歳以上の方
実施日:2020年11月19日、12月17日、2021年1月21日、3月25日



『大～きな下馬の地図をつくろう!』

部屋いっぱいの大～きな下馬の地図に乗って、まちの思い出をおしゃべりしましょう。「この桜並木が好き」「ここにスーパーがあったよね」「お風呂屋さんがごったがえした」...などなど。思い出を地図に書いたり貼ったりして、一枚の大～きな思い出地図をつくります。まちを空から見る気分を味わったり、みんなの思い出を読んだりして、楽しみましょう!ご都合のよい時間にお散歩ついでにお立ち寄りください。ずっと住まわれている方も、最近越してきた方も大歓迎です。暖かくお待ちしていますね。(募集チラシより)

進行役:阿部健一
実施日:2021年1月27日、28日



2021年1～3月

3月21日にシアタートラムで行う「地域の物語2021 演劇発表会」にむけ、下馬で暮らす人々に焦点を当てた2つのプロジェクトを並行して進める。高齢者の方にインタビューしたり、**番外企画『大～きな下馬の地図をつくろう!』**を開催して、下馬の思い出を寄せてもらう。

2021年6月28日

下馬に関わる他の福祉団体やNPO団体などにもお声かけし、集まった9団体と主催の世田谷パブリックシアター、NPO法人演劇百貨店とで全体打合せを行う。

2019年10月

劇場スタッフが間違っって訪れた都営下馬アパート集会所で、偶然、社会福祉協議会下馬・野沢地区事務局(以下、社協)担当と出会う。後日、社協と何が出来るか検討し、手始めに下馬地区会館で月1回の演劇WS「**デイ・イン・ザ下馬野沢シアター(以下、デイ)**」を行うことに。

2020年3～9月

新型コロナウイルス感染拡大を受け、「デイ」中断。

2020年12月

活動中に近くで遊んでいた小学生が飛び入り参加し、高齢の参加者たちがとても喜んでいた様子を見て、地域の様々な年代の人たちが関わり合う取り組みができないかと、「**子ども表現クラブ・極楽**」を企画。最終日に地域の方たちを招いて演劇を披露する。

『デイ・イン・ザ下馬野沢シアター』

楽しく遊びながら、ちょっとだけエンゲキをします!なにをするのか、なんだか興味あるわ、という方ちょっと体験してみようかなという方どなたでも大歓迎です。たまたまの出会いを、エンゲキで楽しみましょう。(募集チラシより)

進行役:花崎攝 対象:どなたでも
実施日:2019年10月18日、11月11日、12月16日、2020年1月9日、2月10日



『子ども表現クラブ・極楽』 『サンタになってパーティをお届け!』

おいしいチキンを食べたりずっと欲しかったプレゼントをもらえたりするのも楽しみだけど、今年のクリスマスは、みんなと一緒にサンタになってみたい?待じゅうの人に夢と幸せを運ぶサンタに、もしも私たちがなったなら...いつもとちがうクリスマスを味わえるかも!? つくった劇は地域の方々に向けて発表します。地域の方々はみんなの劇を楽しみにしているよ。みんなでクリスマスを楽しもう! さあ、準備を始めるぞ。(募集チラシより)

進行役:大道順宗
対象:世田谷区立駒籠小学校・中里小学校3～6年生
実施日:12月22日(火)、23日(水)、24日(木)



2021年4月15日

社協、下馬あんしんすこやかセンター、下馬2丁目北町会、アーティストなどが集い、アートフェスティバル実施の可能性について検討する。新型コロナウイルスの状況は不明だが、ともかくやってみようということに。『極楽フェス』という名前を提案し賛成してもらう。

2021年6～8月

各プログラム決定、会場レイアウトも検討をはじめ。以降、プログラム会場ごとの打合せ、準備。

2021年8月20日

緊急事態宣言の延長が発令(8/17)され、『極楽フェス'21』開催可否について話し合い。複数の企画が中止になる。緊急事態宣言の延長で会議室利用が不可にならないかぎり実施する方針とする。

2021年8月30日 感染対策について最終確認

2021年8月24日
オンラインにて全体打合せ。

2021年8月21日
町会より「新型コロナの感染は拡大しているがやれる範囲・人数で実施しましょう」と言っていた。



GO!
GO!



極楽フェス'21 実施内容

実施日 2021年9月4日(土) 12時～17時・9月5日(日) 10時～16時
会場 世田谷ボランティアセンター/しあわせのもりあわせBAWA(世田谷福祉作業所)
入場者数 206名 関連事業参加者(公演・展示に関連したワークショップ等) 471名

*世田谷パブリックシアターが担当したプログラムのみ公式ホームページより掲載

主催 NPO法人演劇百貨店/公益財団法人せたがや文化財団
共催 下馬2丁目北町会/社会福祉法人世田谷ボランティア協会(世田谷ボランティアセンター、ケアセンターふらっと、地域障害者相談支援センター ぼーとせたがや)/世田谷区立下馬福祉工房
協力 下馬あんしんすこやかセンター/下馬まちづくりセンター/社会福祉協議会下馬・野沢地区事務局/世田谷区立世田谷福祉作業所
企画制作 NPO法人演劇百貨店/世田谷パブリックシアター 後援 世田谷区 助成 公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

\ 上演 /

フォーラムシアター「ピンピン、ヨタヨタ、ドタリの話」

ピンピンしているうちはいいけれど、ヨロヨロしてきたら、ドタリと倒れてしまったらどうする？自分でできることもあれば、地域で助け合えることもあるはず。でも、正直よくわからない…。フォーラムシアターでは、具体的な事例を演劇にして、こんな時は「こうしてみたら？」と演劇のなかに入り込んで試してみます。具体的な場面だから、わかりやすい！楽しみながら、身の回りで起こる課題を一緒に考えてみませんか？

時間 9月4日(土) 13時45分、9月5日(日) 12時30分
場所 しあわせのもりあわせBAWA
台本・構成 極楽フォーラムシアターチーム
出演 有吉宣人、開発彩子、花崎攝、早川由美、山本雅幸
協力 あんしんすこやかセンター



\ 上演 /

下馬人生スゴロク演劇「極楽への道」

下馬人生すごろく演劇は、下馬に住む人々から聞いたお話と時代時代の出来事が書かれたコマで遊ぶスゴロクです。こんな人生を送る人がいるとしたら？と想像しながらスゴロクを進めていきます。止まったコマに書かれた出来事は、俳優たちによって演じられます。演劇を楽しみ、空想の人生経験を重ねながら、極楽を目指していきましょう。

時間 9月4日(土) 12時、15時30分
9月5日(日) 10時30分、14時30分
場所 しあわせのもりあわせBAWA
構成・スゴロク製作 いけだとも実、柏木陽
演奏 青木拓磨
出演 大石将弘、青木拓磨、青山公美嘉、いけだとも実、柏木陽
協力 下馬地区にお住まいのみなさん



\ 参加 /

「下馬兵舎時代の思い出の絵地図」

昔、下馬には軍の兵舎が立ち並び、戦後は住む場所に困った人たちがそこで大勢暮らしていました。「兵舎の時代 思い出の絵地図」では、兵舎時代から今まで下馬にお住まいの方々の貴重な思い出話をもとに、一枚の絵地図をつくりました。当日は完成した絵地図を配布するほか、絵地図を大きく貼り出し、ご来場のみなさんの思い出話も伺っていきます。あの時代を思い出したり、下馬の移り変わりに思いを馳せたりしませんか？

時間 9月4日(土) 12時～14時、9月5日(日) 10時～16時
場所 世田谷ボランティアセンター
進行・編集・文 阿部健一
地図デザイン 斎藤優依 イラスト タン・リンセン
協力 下馬地区にお住まいのみなさん



\ 参加型上演 /

「介助と障害を巡る旅～ゆうじさんちシアター」

「介助と障害を巡る旅」は重度脳性麻痺のゆうじさんと彼をサポートする介助者たちのことを考えながら巡るツアー型の演劇です。世田谷ボランティアセンターからスタートし、ゆうじさんの住む部屋に実際に行ってみます。彼らが何をしてどんな状態でそこにいるのかを想像してみてください。最後はゆうじさんと介助者さんが待つカフェで自分たちの体験を話してみましよう。

時間 9月4日(土) 12時30分、13時30分、14時30分、15時30分、
9月5日(日) 10時、11時、14時、15時
場所 世田谷ボランティアセンター、ゆうじさんち
台本・構成 柏木陽 映像 小林功弥 台本協力 山本雅幸、有吉宣人
出演 佐藤幸子、岩原正典(回ごとに出演者は異なります)
協力 実方裕二、たくろうさん、まつもとさん、かざまさん



\ 展示 /

写真展示「写真クラブ・極楽」

下馬地域の65歳以上のみなさんと月2回のペースで開催している「写真クラブ・極楽」では、おひとりずつの人生のお話を聞くことを何よりも大切にしています。写真には否が応でもその人らしさがあらわれてくるからです。クラブ参加者のみなさんが撮影した写真を通して、それぞれの「生の声」を感じてください。WS進行の写真家金川晋吾さんも参加者と共同制作をした写真作品を展示します。

時間 9月4日(土) 12時～17時、9月5日(日) 10時～16時
場所 しあわせのもりあわせBAWA
写真 金川晋吾(WS進行・写真家)、「写真クラブ 極楽」参加者



\ 上演 /

「ともにやの部屋～黒田真史さん」

伝えたいことがあります。10代の最後に大きな事故。自由に動くのは指1本。それでも出雲大社に。名古屋城で金箔アイスに。果敢に活動。そこから見えたものは…そんな黒田さんの人生を、司会のともにやがお聞きます。

時間 9月5日(日) 11時30分～12時
場所 世田谷ボランティアセンター
司会 大道朋奈
ゲスト 黒田真史
協力 演劇ボランティアのみなさん



\ 上演 /

「ひらけ絵本！」

絵本の読み聞かせは、聞いている人が想像しやすいように、文章がそのままが伝わるように、アナウンサーのように読むのが普通です。でも、この「ひらけ絵本」はちょっと違います。俳優さんたちは、嵐の場面はもっと荒々しく、おいしい場面はもっと美味しそうに読みたくなってしまうんです。そんな俳優たちによるアクティブな絵本の読み聞かせ、聞きにきませんか？

時間 9月4日(土) 13時15分～13時30分、
9月5日(日) 14時30分～14時45分
場所 世田谷ボランティアセンター
読み手 有吉宣人、大道朋奈



「会場装飾」ワークショップ

福祉団体の利用者さんたちにもフェスに参加してもらうため、会場装飾を一緒につくるWSを実施しました。
世田谷福祉作業所WS 8月2日(月)、12日(木)、20日(金)
下馬福祉工房WS 8月24日(火)





2023年度 世田谷パブリックシアター学芸事業

子ども対象

あかちゃんから小学生、中学生、高校生まで、子どもたちが演劇やダンスなどの舞台芸術と出会い、見て、感じて、楽しみながら参加できるワークショップを行っています。

- 子どもごちゃまぜワークショップ [毎月開催]
- 世田谷パブリックシアター中学生演劇部
1～3学期ワークショップ [6月、9～10月、2024年3月]
- せたがやこどもプロジェクト2023 [7～8月]
- 春休みこどもワークショップ [3月]

区民参加

毎月開催している「デイ・イン・ザ・シアター」から3ヶ月にわたる「地域の物語」といった演劇ワークショップ、三茶の街を舞台に行うフェスティバルまで、いろんなかたちで劇場や街を体験できます。

- デイ・イン・ザ・シアター [毎月開催]
- 『フリーステージ2023』 [4月29日～5月7日]
- 世田谷パブリックシアターダンス食堂 [9月ほか]
- 世田谷アートタウン2023『三茶de大道芸』
[10月21・22日]
- 『地域の物語2024』ワークショップ
[2024年1～3月]

地域連携

世田谷区立小・中学校や区内の非営利組織や団体、社会福祉法人等と連携して、地域社会の抱える課題解決に向けたさまざまな演劇の実践を行っています。
*連携パートナー経由でご参加いただけます。

- かなりゴキゲンなワークショップ巡回団
[5月～2024年3月]
- 下馬地区アートプロジェクト(極楽フェス2023) [7月]
- 移動劇場あっとホーム公演『チャチャチャのチャャリー～あなたとチャチャチャ～』 [6月]

専門家育成

舞台芸術に関わる専門家育成の場として、演劇ワークショップの進行役、研究者、大学生らを対象にしたプログラムを実施しています。

- 演劇ワークショップラボ2023 [4月～2024年3月]
- インターンシップ [7～8月]
- 舞台技術講座 [8月・2024年4月]

刊行物

- キャロマグ
- 学芸プログラム通信

たまにはこんな役 #19



【キャロマグ】
Vol.19 / Mar.2023

発行日
2023年3月20日

発行
公益財団法人せたがや文化財団
世田谷パブリックシアター
〒154-0004
東京都世田谷区太子堂4-1-1
Tel. 03-5432-1526
https://setagaya-pt.jp

世田谷パブリックシアター芸術監督
白井晃

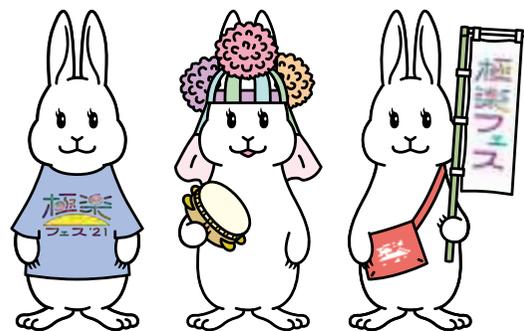
企画・編集
恵志美奈子、九谷倫恵子、
塩原由香理、石川恵理、中村麻美
(以上、世田谷パブリックシアター学芸)

協力
岡田陽子、山本雅幸

デザイン
和田みさき

学芸スタッフから

- ホラー映画を映画館で見るのが大好きです。最近面白かったのは、タイ・韓国合作ホラーの「女神の継承」。じわじわとにじりよるような不気味さが迫り、モキュメンタリーという手法も相まって見応えがありました。ストレス発散にホラー、おすすめです! (い)
- 「極楽フェス'22」で数十年ぶりに盆踊りを踊りました。太鼓のまわりをぐるぐるとえんえんと踊りまわりつづけるうちに、頭はぼうっとしてきて、すべては霞がかかり、まるで白昼夢をみているような気分。不思議な体験でした。(く)
- 2月の頭ごろから、朝目が覚めると、目がかゆくなり、くしゃみが出て、鼻がムズムズするようになりました。まさに花粉症の症状オンパレード。にもかかわらず、「花粉症ではない!」と意地を張ってきました。しかし、もう無理です、認めます。私は花粉症です! (あ)
- ミルクティーが大好きです。特に、家で入れるたっぷりミルクの入った紅茶が大好きです。この前、年間のティーパックの消費量を数えたら約400個! 1ティーパックで2回ほど飲むので、年間飲料数はなんと! 800杯。さて、牛乳の年間消費量はどのくらいになるのか……そんなことを考える今日この頃です。(し)
- 小田原で朝10時に用事が終わり、寄り道しようと思いましたが、充電器を忘れて携帯は完全オフ状態。とりあえず箱根湯本に向かってみました。電車やバスを30分待ったり、都心の戻り方が不明だったり、最適化されてないばっこの時間の流れは割と楽しかったです。(え)



今年も
極楽フェスやるよ!
来てね

CarroMag. バックナンバー



バックナンバーはこちらから読みいただけます。

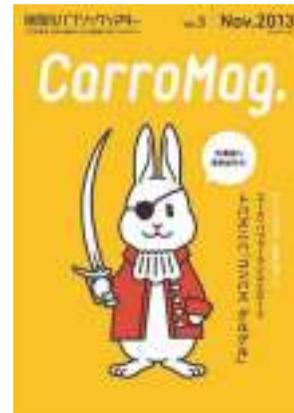
<https://setagaya-pt.jp> (「ワークショップ・レクチャー」から「出版物ほか」にお進みください)



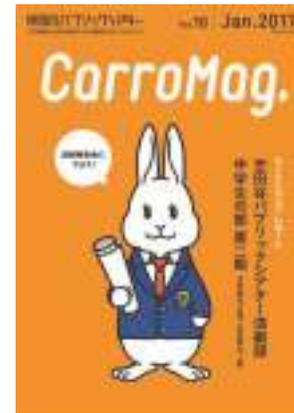
『地域の物語』2011-2012
1960年代の世田谷



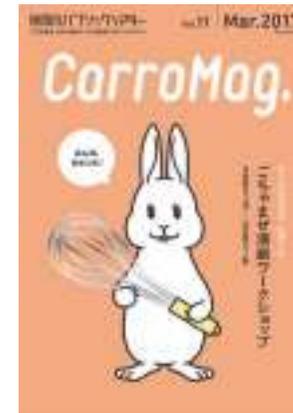
高校生のための演劇ワークショップ'12



ユース・パフォーマンス2013
トバズニハ『コンパス グルグル』



世田谷パブリックシアター演劇部
中学生の部 第二期 2015-2016



ごちゃまぜ演劇ワークショップ
2013-2016



『地域の物語』2016-2017 生と性を
めぐるささやかな冒険(女性編)<男性編>



舞台芸術のクリティック



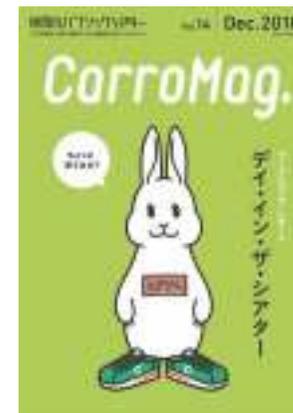
世田谷のこえアーカイブプロジェクト2012-14
世田谷で暮らすー移り住むこと、移り住むひと



世田谷パブリックシアター演劇部
中学生の部



かなりゴキゲンなワークショップ巡回団
大規模校学芸会編



デイ・イン・ザ・シアター



世田谷パブリックシアター演劇部
中学生の部 第二期 2017



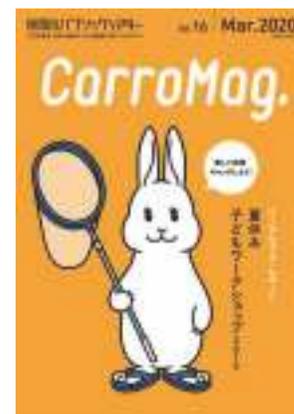
かなりゴキゲンなワークショップ巡回団
学芸会編



かなりゴキゲンなワークショップ巡回団
特別支援学級(通級)編



『地域の物語』2014-2015
介助・介護を考える



夏休み子どもワークショップ2019



コロナ禍の夏休み子ども
ワークショップ2020



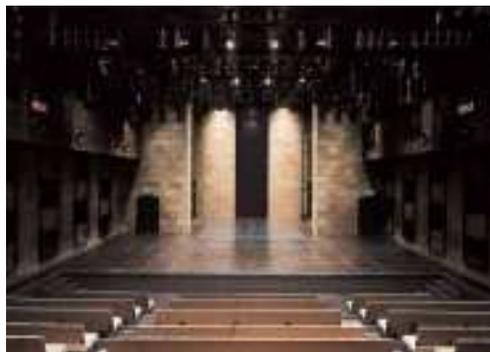
「だれでも表現クラブ・極楽」
「だれでも写真クラブ・極楽」

世田谷パブリックシアターとは

世田谷区がつくり、(公財) せたがや文化財団が運営している、演劇やダンスのための専門劇場です。三軒茶屋のキャロットタワーの中に、世田谷パブリックシアター (約600席)、シアタートラム (約200席) の2つの劇場と稽古場、作業場などを擁し、ワークショップやレクチャーなどの参加体験型事業にも力を入れています。



世田谷パブリックシアター (主劇場)



シアタートラム (小劇場)

世田谷パブリックシアターへのアクセス



お問い合わせ **世田谷パブリックシアター**

〒154-0004 東京都世田谷区太子堂4-1-1 キャロットタワー 5階

Tel.03-5432-1526 (代表) Fax.03-5432-1559

<https://setagaya-pt.jp>

世田谷パブリックシアターは、東京都世田谷区太子堂の三軒茶屋駅にある26階建ての高層ビル、キャロットタワーのなかにあります。東急田園都市線、東急世田谷線三軒茶屋駅と直結しています。